2008.7.12　現代資本主義研究会

松尾匡『「はだかの王様」の経済学　現代人のためのマルクス再入門』(xxi+288 ページ、東洋経済新報社、2008 年)へのコメント

西　淳

I　特徴

・特徴 … マルクスの体系を「疎外論」という視点から統一的に解説し、疎外なき社会への展望(その部分はかならずしもマルクスに忠実ではない)を提示する。マルクスを、ただマルクスの言葉をもって語るというのではなく、現代の社会科学の議論などとも関連させつつその現代性を考える。マルクスからの引用を避けることにより読みやすくなっている。

II　貢献

・疎外論を、“主体 vs.客体”といった哲学的タームから社会科学的な概念へ翻訳したこと(ゲーム論的解釈による)。絶対精神や共同主観性のように、なにか人間を拘束するものを実体化してとらえるのではなく、そのような疎外された状態を、コミュニケーションができない個人の間のゲーム論的な安定状態としてとらえたこと(方法論的個人主義)。

・疎外という現象をより普遍的に解釈することで、その一般的性質を明確にしたこと(＝疎外は、(1)各自が社会的依存関係の中で結ばれあって生きていて、(2)にもかかわらず、依存関係の中にある各自の間で、十分に情報交流しあえないときにのみ生じる(93 ページ))。

・「大きな物語」(J.F.リオタール)への後退ではなく、アソシエーション社会の構築のための日々の活動にこそ意味を認める(歴史の必然性としてではなく、人々が主体的に選びとっていくものとしての「疎外なき社会」)点。

III　疑問点・希望

・提示されているモダンの視点が、ポスト・モダンとの対話・批判を通じて出てきているものであることがもっと強調されればよかったのではないか?

・ポスト・モダンからの批判としては、(1)コミュニケーションがあれば事態は改善されるというが本当か?　(2)本当のことを多くの人々は知っているが(あるいは知っていたが)、情報交換がないから悪い事態が生じてしまう(しまった)、という論理構成になっているが、それほど人間は合理的か?　などといった批判がありうるのでは?

・システムの疎外にすべての原因をもとめてしまうと、個人や特定の集団の責任という問題はどうなるのか(疎外論よりすればシステムが悪いのであり、権力者はあくまでその役割を遂行しているにすぎない、という解釈となる)?

・ニーズにもとづく生産をもっとも効率的に実現するのは分権化された市場経済である、というのが経済学の主張。あるアソシエーションに参加する人々が増大しても、市場よりもうまくニーズを知ることができるだろうか? 直接ニーズを知ることのできる社会を作ろうとすることによって、逆に大きなコストがかかってしまうという危険性はないか?